



と www.tenpla.net
プラネタリウム

vol.
175

今月のお題
.....

秋深し、隣はなにををする人ぞ

天プラの活動も始まってはや15年。天文学普及プロジェクト…などと名乗ってはみるものの、どうなのでしょうね。そんなお話し。

高梨直広 (東京大学) / 平松正顕 (国立天文台チリ観測所)

「天文学の楽しさを伝える活動をされているんですね!」と言われることがあります。筆者(高梨)は脊髄反射的に「ええ、子どもたちに宇宙の楽しさを伝えたくて!」なんて答えてしまうこともあります。その後はひとりトイレで反省。また適当なことを言ってしまった、と。

放射線飛び交う宇宙空間が人間に優しい訳がないですし、先日のソユーズの事故のように宇宙での活動は常に危険と隣り合わせです。火星や金星に人が簡単に住めるわけもなく、太陽がちょっとでもしゃみをすれば地球の文明などはあっという間に吹き飛ばはず。超新星爆発に巻き込まれたくもないですし、ブラックホールに吸い込まれるのだからまっぴらごめんです。無限に続く空間や、時間の長大さを真面目に考え始めたら、底なし沼にはまること間違いなし。そういうのも含めて「楽しい」というマゾヒスト的な感覚もあり得るかもしれませんが、

そういったことのために活動しているわけではないような気がします。

そもそも、天文学は宇宙の謎を解明するための学問として発達してきたわけではないはず。科学的思考が形を見せ始めたギリシアの時代からごく最近に至るまで、自然科学の目的は「存在」について思索を深めることでした。宇宙を知ること、そのための手段のひとつに過ぎません。言い換えれば、伝統ある天文学の目的はあくまでも宇宙を通じて、自分という存在を探究すること。その過程では、知的に興奮することもあるでしょうし、畏れを抱くこともあるでしょう。すでいけど自分とは関係ない話として宇宙に触れるのではなく、自分という存在の根幹を揺るがすものとして宇宙に触れてもらうことに意義がある。そのような意識の下で、TPOに合わせて「星空の楽しさ」とか「科学の面白さ」を伝えようとする活動と、いった方が、より適切かもしれません。



今年も、六本木天文クラブの星空案内人養成講座が始まりました。自分なりの宇宙との付き合い方を見つけてもらえたら嬉しいなと。

さらに言えば、「伝える」という表現にも違和感が。私には、誰かに伝えるべきなにかが本当にあるのか。むしろ、周りの皆さんから私を見つけてもらって、私が私を発見していく。そのための手段として宇宙を利用しているのだと考える方が、実にしっくりきます。私がいったいなにものであるのか、私とはどういう人間として生きるのか。それを確かなものにしていくために、活動をしているのだ、と。

まあ、ふだんからそんな重いことを考える必要はないと思うのですが、秋深し。たまにはそういったことに思い巡らすのも、悪くはないかも?